
老狐と蜂蜜姫

天武

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

老狐と蜂蜜姫

【Nコード】

N8620W

【作者名】

天武

【あらすじ】

何百年も生きた九尾が綴る物語。

第一卷 黄巾の乱1

side 玉藻

後閑末期、国の腐敗と官僚達の横暴に国は乱れ
民は苦しみ、明日を生きるのに必死だった。

そこへ現れた張角という者が民衆に対してデモを呼びかけ、黄巾党
が設立された。

だが、当初は国への反対運動だったこの党も次第に単なる賊へと成
り下がった……。

「この世に生を受け、何百年の時を生きてきたがそれでも暇な物は
暇じゃな」

酒を片手に今宵の月を見上げる。その姿は実に美しく妖艶でさえ
もあつた。

部屋の窓からでは空全てを見渡せない。

だがワシは窓に映る景色だけでも十分に酔いしれた。

過去にいようと遙か未来に行こうと月はその姿を変える事無く美し
く輝いていた。

後閑末期に起こった黄巾の乱。

それは大陸全土を巻き込んだ大規模な乱であり

ワシはそんな中を渡り歩き、

ついにはあの袁術の元に側近として暮らしていく事になった。

それがワシが今いるこの世界。

あまりに都合が良すぎるから一時は夢だと思い込んでいたが、
度重なる側近としての疲労に全ては現実だと悟らされた。

「玉藻」

すぐ傍でワシの名を寝言で呼ぶ者こそワシの主でもある袁術こと美羽であった。

その笑顔は可愛らしく、まるで人形であるがそれを見る度に後悔の念がこみ上げてくる。

ワシが彼女の側近として抜擢された際、

美羽はまだ幼い子供であった故育て係としても任命された時ワシは後悔した。

ワシという余計な存在のせいで存在を抹消された者がいる事に……。

「ワシは……」

いや、もうやめよう。

いくら考えても答えが見つかるわけなく、

抹消された存在が戻ってくる事などないから。

今ある役目を果たせば言いだけの事。

それがワシが抹消された存在へと与えられる贖罪だから

。

朝、ワシは美羽の世話を侍女に任せ執務室へと籠った。

机に腰掛け、目の前にある紙を一枚めくってはサインをし

一枚めくってはサインした。

しばらくして侍女が扉を開けて中へ入ってきた。

「館にて孫策様がお待ちです。なんでも玉藻様に用があるようできて……」

「そうか。ならこちらへ来るよう伝えてくれ」

ワシの言葉を聞いた侍女が部屋を出て行く。しばらくして孫策が部屋に入ってきた。

「お久しぶりです先生。いくら私しかいないとはいえ、尻尾出しているけませんよ?」

「もうワシはお主等の先生ではないのだ。そんな他人行儀はよせ」

少しばかり世間話をした所で侍女が茶を持ってきたから二人でそれを飲み

一息ついた所で雪蓮が話を切り出してきた。

それは漢王朝から下された黄巾党討伐命令であった。

美羽は孫策の事を使い勝手のいい部下としか思っていないだろう

彼女を荊州北部の本隊へとぶつける命令を下した。

まあ大方嫌がらせか何かだろう。ならそれを利用するか。

「その任務、ワシも参加しようではないか」

先生がまさか袁術ちゃんの所にいるとは微塵にも思っていなかった。先生が突如、学問所から姿を消した時は私も冥琳も肝が冷えそうになった。

この乱に巻き込まれ命を落としたのではないだろうかと思っただけだ。

だが先生は生きていた。　　だけど、なんで袁術ちゃん所にいるのかしら？

「特に意味などない。　　ただ世の流れに身を任せたらここにいただけだ」

「！？　　せ、先生でしたか。　　驚きましたよ」

先生は今まさに九尾の姿を取っていた。

外見こそ白い狐だが、事情を知っている私にはそっちの方がヒヤヒヤ物である。

そう。　　先生の正体は何百年も生きた九尾そのものである。

「美羽には一日もすれば帰ってくると言っている。　　ほれ、行くかの」

そう言っただけ先生は城の窓から跳躍する。

私はそんな危ない真似はせず、素直に門から出て行った。

城を出発して一刻も経たずに私達が住む館へと辿りついた。外では冥琳達が出迎えに出ていた。

「お帰りなさい、雪蓮。　　それと……　　先生も」

「お主もワシを先生と呼ぶか」

「先生はいつまで経っても先生ですよ。それより冥琳」

「うむ。 儂の方はすでに準備は整えておる。 いつでも出せるぞ」

「それでは行くかの」

準備を済ませ、私達は館を後にした……。

第二卷 黄巾の乱2

side 玉藻

荊州北部に位置する黄巾党の陣へと向かっている間ワシは人へと戻り千里眼を駆使し陣の中を確認していた。すると、その中にこれまた面白い奴が紛れ込んでいた。

「？ 先生、どうしたのですそんな笑顔になられて」

「いや、なんでもない」

その腐れ縁はこちらの姿を見つけるとその透き通った笑みを返してきた。

それはまるで獲物を見つけた飢えた狼の様な……。

「しかし孫呉の大事な初陣が黄巾党とはな……。これはどうにも……」

「戦いに慣らすにはちょうどいいでしょ」

その後も雑談を繰り返していくが否にも戦場の空気が辺りを包み込む。

後ろに付いてくる兵士達の顔にも兵士特有の顔つきが見られた。

「そつえば冥琳。この戦いに何か策とかある？」

「策…… そうね。あるとすれば火計ね」

「なら、それに決定ね」

策が決まり意気揚々とする雪蓮。それをため息つきながらも微笑む冥琳。

後ろの兵士もそれに影響されてか少しばかり気が緩んでいた。

しばらくして黄巾党と思しき陣を発見し、斥候を何名か送りつけた。数刻もしない内に帰ってきて、陣が黄巾党の物である事が判明した。

「敵、5000人ほど確認しております。陣は壺のような形をしており出口はないかと」

「ご苦労様、後はゆっくり休んで下さい。…冥琳」

「ああ。これなら火計はかなり期待できる。それでは…」

「済まぬが……少しワシに時間をくれないか？」

side 空狐

まさかこんな辺境の地であいつに再開するとは思わなかった。

あいつを見た瞬間から体がまるで沸騰しているかのように熱くナイフが握られた右手は脈が浮き出そうなほど力んでいた。

それこそ何時でも殺せる様に体が準備を行っていた。視界はいつの間にかあいつしか映っていなかった。

「姉御っ！ 孫呉の将らしき老兵が一人でこちらに向かっておりま

すー!!」

「あんたらは武器持って待機。もう少し様子を見るよ」

様子を見る？ 何言ってるんだ私。

だったらその今にも動き出しそうな右手はなんなんだ？

あいつをそのナイフでバラしたいのだろう？

あいつをそれこそ一口サイズにバラしたいのだろう？

あいつの生き肝を喰いたいのだろう？

あいつの全てを食らい尽くしたいのだろう？

お前がしたいのはあいつの解体ショーだろ？

……そんな考えを振り払い、私はいつの間にか目の前にいる老兵に目を向ける。

「やれやれ、その眼はどうにかならんか？」

「残念だけどそれは無理な話ね」

老兵の周りを黄巾党の賊達が囲む。

だが、あいつは涼しい顔してこちらを見ていた。

怖くないのだろうか？ 自分が肉片に変えられるかもしれない事に。

「ワシはお主等と戦いに来たわけでない。交渉しに来たのじゃ」

「……いいよ。話なら聞いてあげる」

交渉？ 一体何の交渉だろうか？
話を聞く為、私はあいつと共に数人の賊を連れてテントの中へ入った。

「……つまり、私達はすでに包囲されていると？」

「そうだ。ここで降伏すれば命は助けてやれる」

こいつの話によると私達の陣は孫呉の兵に取り囲まれているだとか。包囲か……。こいつ、私が千里眼持っているのを知って言っているのか？

「それにそつちの方がワシに都合が良いのではな」

「都合が良い？ どう言う事。あなたは孫呉の兵ではないの？」

「ワシはその孫呉の上に立つ袁術の世話係じゃ 孫呉に味方している訳でない」

孫呉でなく、その上の袁術の配下か……。

一体何をどうすればそんな所に行きつくが教えて欲しいものだ。

しかし、それでもなぜこいつは私達に交渉を持ちかけてきたんだ？

「いずれ敵になる奴の為に兵5000を殺すのは惜しいのでな。
殺されるぐらいならむしろワシの私兵にしてやろうかとな」

……なるほど。 実にあんたらしい事だ。

しかしそれで私がハイと頷くと思っっているのか？

「お主がいえでも、お主の配下はどうなんじゃるな？」

確かに。リーダーと家来の考えが同じとは限らない。

だからと言ってリーダーが一人でやっても何の意味も持たないし、無理矢理従わせればいずれ家来は離反する。

「……そうかい。だが、無条件で下る訳にはいかないね」

降参するにしてもただで降参する気は毛頭ない。

何か条件を突き付けて降伏する。それが無理なら私だけでも徹底抗戦する

「分かっておる。ワシとの決着じゃな？」

「分かってるねえ。そうさ、あんたとの決着を付けるまで私は降

伏しないよ？」

そうあんたと私だけ、立った二人の殺試合

「それは今すべき事か？」

「今でなくてもいい。だけど、いずれ必ず……」

そう言っつて私は彼を抱き寄せ、その唇に自分の唇を重ねた

最低限の紹介

玉藻

性別

身長モラル
トキ

一人称 ワシ

攻撃方法 素手 神通力

今作の主人公。

年齢は4000以降把握しておらず、本人でも大体の年齢しか分からない。

特殊な能力（神通力など）を持ち、暇さえあれば異世界へ飛ぶこともある。

— 世界に付き何百年生きて、別の世界へ飛ぶ。
今回は恋姫の世界。

空狐

性別

身長モラル
園崎魅音

一人称 私、あたし

攻撃方法 ナイフ 神通力

今作のヒロイン

年齢は3000歳。 玉藻とは2000年前から殺試合を繰り広げており

本人は決着を望んでいるが、玉藻はどうしても良い事だと思っている。彼女も異世界へ飛ぶ事が可能である。

第三卷 黄巾の乱3

side 玉藻

ワシは黄巾党を引き連れ、雪蓮等と合流した。

その光景に二人は驚いたが、少しして笑いだした。

「先生がまさか黄巾党を降伏させたなんて、プフツ」

「正直、今の光景が信じられんのもう」

それはそうだ。官軍が数をいくら注ぎ込んでもまるで歯が立たなかつた黄巾党がたつた一人の老人に降参し、服従しているからな。

その後、ワシは冥琳と別れ雪蓮達と共に本城へ、王室へ戻つた。

side 空狐

「ご苦労じゃつた孫策」

全く感謝を感じさせないお礼の言葉。孫策と呼ばれた女ももそれに感ずいているのか、顔に全くの変化が無かつた。

「袁術ちゃん。一応黄巾党の連中は壊滅くわいてつさせたわ」

「おおー そうかそうか」

「その褒章として、孫呉復興の援助を……」

「孫呉復興？ なんじゃそれは？」

袁術はまるでそんな事知らないみたいに首を傾げる。

だが、それが白を切っているという事に皆気づいていた。恐らく、約束など果たす気など端から無かったんだろう。

「反故する気？ 時が来れば孫呉復興の援助を……」

「…確かにしたのう。 じゃが、今はそこらに黄巾党共がいるではないか。」

そんな時においおいと復興に手を貸せる訳ないと思うのじゃがのう」

「……まあいいわ」

退出する瞬間、彼女の影から鬼が視えた。 よほど切れているのだらう。

孫呉復興の約束を反故する気マンマンな袁術に……

「アンタ、あんな約束を反故する奴の傍で働いているんだろ？ 気の毒だね」

「まあ慣れれば楽しい事よ。 お主はワシの部屋で休んでおけ」

その言葉に聞き、私は悠然と立ち去った。

一瞬、孫策の背中に鬼が見えたような…… 妾の気のせいか？

「美羽。 お主も休め。 後はワシが引き受けようぞ」

……そうじゃな。 今日はまだもう休もう。

私は王室を出て、寢室のベットへ身を投げ出す。

白く柔らかい毛布が妾を安息へと誘う。

抵抗など無意味で、意識はゆっくりとその電源を落とした。

side 玉藻

空狐はどうやら何か勘違いしておるようだ。

美羽は約束を破る気など端からない。 それを今果たしても無意味だから果たせないのだ。

美羽が少し前に言っていたのを思い出す。

孫呉復興の手を貸したとていずれ黄巾党に土地を盗られるだけじゃ。

そうならそこにいる村は？ 民はどうなるのじゃ？

孫策との約束の事を考えている際、

美羽は小さな頭で考えた結末の一つをワシに告げた。

ワシはこう答えた。

民は食い物にされ、村は滅びるじゃろ。 だが、彼女等ならそんな事には……

嘘。 あんな少数であんな広大な土地を守れるものか
人は非力な者だぞ？ 玉藻みたいに強くは無いだぞ？

そう言われ、ワシは口を閉ざした。

……いかん。 つい黄昏てしまった。
いつの間にか外は日が沈み、美しい月が空にその姿を彩っていた。

「さて、そろそろ出かけるか」

ワシはそう呟き、城の外へ、町の外へと出る。

そこでワシは本来の姿へと戻った。

それは白い体毛に覆われた四肢。 顔はまさしく狐。

二本の足で大地を踏みしめる。 尾はそれぞれが独特の動きを見せる。

雪蓮の前で見せたあれは不完全な形。 確かに狐だがただの狐では戻ったとは言えない。

「やはり元の姿でいるのは中々心地よい物よ」

人間の姿では何かと窮屈な感覚を味わっていたが、夜遅くにはこうして本来の姿へ戻る事でその窮屈さを解消していた。

「……空狐は美羽の事、そこらの成金共と思っ込んでそうじゃ」

あいつは妙に正義感が強いというか……
ただ単にバカなだけか……

side 玉藻

黄巾党との戦から早数カ月。 少なくとも荊州は平和であった。

各地に点在する豪族や諸侯達が奮起しても黄巾の乱に終息は見えなかった。

それに業を煮やした王朝は自ら大軍を率いて黄巾党の本隊と衝突するが結果は大敗。

圧倒的な数に、元々農民だった者にさえ負ける官軍に誰もそもそも期待していなかった。

そんな中、人の目を引く働きをする諸侯が現れる。

許昌に本拠を構える乱世の奸雄『曹操』 美羽（袁術）の従姉の『袁紹』。

幽州の『公孫賛』。 義勇軍でありながら連勝を重ねる『劉備』。

これらの活躍もあって黄巾の乱は着々と終末へと向かっていた。

「今こそ黄巾党の本隊を根絶やしにしろ！！
もな……」
と言われて

王朝から届いた文にため息をつく。

内容は小難しく書かれてはいるが、要約すると

『我らではどうにもできないからお主らでどうにかしろ』という事である。

仮に大陸の頂点として立っている者として恥ずかしくないのだろうか？

「なんじゃ玉藻。 九尾であるお主も流石にこの数では手をこまねくのか？」

「ワシとて全知全能でないからのう。 流石にこれは骨が折れるわい」

別に本来の姿に戻れたならそれなりに楽に片を付けれるだろう。だが、それを他の諸侯達に見られもしたら美羽の立場が危ういのかもしれん……。

そういえば一度本来の姿で戦った事があつたような……。その姿を見た美羽は泣く所かむしる喜んでいた。まるで子供が戦隊物のヒーローを見ているような感じであった。

「ならこの件は孫策。 そちに任せたぞ！」

「無理言わないで頂戴 私の兵は一万よ？ その文の話だと十万はいるんじゃないかしら？」

確かにそれでは雪蓮が圧倒的に不利である。いくら将が強くてもこれでは数の暴力に押し潰されるのが目に見える。

「ただ…… 各地に散らばっている呉の皆を集めれば何とか成るかも知れないわね」

はてされこれは中々おもしろい話になった。

王朝の命令通りに本隊を潰すには、雪蓮の所では数が圧倒的に少ない。

そこで雪蓮はかつての仲間を呼べば可能だという条件を突き付けた。

だがそれでは折角分断した孫呉の力が元通りになり、文字通り孫呉は復活する。

下手に仲間を集結させればその場で美羽に攻撃を仕掛けるやもしれん。

これを解消するにはワシを投入するか、美羽の兵士を雪蓮達に与えるか。

だが、ワシを投与するという事は美羽は武器を投与するのと同じ意味を表す。

兵士を与えようとも変わらず、美羽は大きな力を失いかねない。

さて、美羽はどんな答えを言うのかのう。

「いいじゃろ。仲間を集め出撃するが良い」

「……分かったわ」

それを聞いた雪蓮の顔が少し、ほくそ笑んでいた。

これで、雪蓮に反撃のチャンスが与えられた。

仲間を集め、黄巾党を討った後かそれともその前に反撃が来るかもしれない。

ワシが知っている雪蓮なら恐らく黄巾党を討った後に来るだろう。

じゃが、警戒ぐらいいは張って置かんとな。

「出撃する際にそつちに報告送るわ」

それを言い残し、雪蓮は立ち去った。そして、微かにだが独立の気配を感じた。

「では、ワシ等は別働隊を討つというのだな？」

「そうじゃ」

しかし、別働隊を討つたとしても対して効果は期待できない。別働隊はそれこそ先ほどの雪蓮の一万でも勝てるぐらいしかない。それに……

「すでに王朝の権力とやらは地に墮ち、民は不安を浴びている。それを嗅ぎつけた諸侯達が次々と台頭。

恐らく、この乱が収まれば群雄割拠の時代が来るかもしれん。

ここで本隊に攻撃を仕掛け、名を上げるのも悪くないのでは？」

多少危険性はあれど、名が売れる利益に比べればそこまで嫌悪するレベルではない。

「そんな事、孫策に任せておけば…… と言いたいのじゃが、それも悪くないのう」

「なら？」

「……うむ。玉藻よ！ お主は今すぐ黄巾党本隊を叩きに行くのじゃ

「……」

それを聞いて私はそこを立ち去った。

途中、事情を知った空孤が自らの部下を連れ合流を果たそうとしたが美羽一人では少しばかり不安だから、空孤達は美羽の別働隊の方へと回した。

こうして、ワシは黄巾党本隊を。

美羽、空孤は別働隊を攻撃する為、出撃した

。

第四卷 黄巾の乱4

side 孫策

二日掛け、黄巾党本隊がいる陣へと駆けつけた。周りには久しく再開を果たした姉妹、仲間がいる。そして、各地に名を知られる諸侯達が。

「雪蓮 部隊は整ったぞ。いつでも… と言いたいが」

「どうしたの？ いけるなら行かせれば良いじゃない」

「そうだな…。少なくとも先生がいなければな」

先生が？ 部隊の出撃ができないのは先生のせいだって言うのかしら？

いえ、それよりなんで先生がここに……。

「どういう事？ 先生が邪魔をしてるって言うのかしら？」

「邪魔をしてるわけではないが… 見れば分かる」

そう言って冥琳は指を刺した。その方向へ視線を向けると……。先生がいた。目を真っ赤に染めてー。

「ほうわたあ！！！！」

「ばびゅ!!?」

半裸姿の先生が怒声を吐きながら賊を薙ぎ倒していた。

私達が着く前からすでに殺り合っていたのかあちこちに賊の死体が転がっていた。

「雪蓮。あの中に兵を投入したらどうなるのじゃのう?」

「…想像もしたくないわ」

お互い顔を真つ青にしながらあまりに一方的な殺戮劇場を見ていた。

先生の剛拳に体を粉碎される者。直撃を避けてもその衝撃で吹き飛ばされる者。

蹴り飛ばされ、さらに無数の拳を浴びせられ地面に叩き落される者。見ていると賊達が可哀想に見えてきた。

side 玉藻

襲い掛かる賊共を薙ぎ払い、逃げる者は逃がし、向かう者には剛拳を浴びせた。

後ろを取ろうとした賊を蹴り飛ばし、正面の賊共は無数の剛拳で叩き伏せる。

「戯けがつ!!」

「ぐぐむやあ!!!!」

無数に沸く賊共を血の池に叩き落とし、投げ捨てる。
辺りには血の池と飛び散った肉塊。

球体の頭を踏み潰し、残った体を持ち上げそれを近くへ怯える賊へ
投げつける。

仲間の死に様を見た賊はこれでもかと叫び、壊れた。

ああ。なんて快感。なんと幸福。僥倖。

久々に人を殺す快樂は格別だ。

喉が渴きに晒され、ミイラのように枯れた喉に水を通した際にでて来
る快樂。

耐えに耐え、苦悩の末に得られた坊主の如き幸福。

無限に湧き上がる人を殺すのは無駄であり、有効的な活用をすべき
だ。

だが、だからと言って殺すの止めるのは無理な話だ。

「ぎゃああ　　あああああっ！！！！」

まるで音楽の様に鳴り響く人の鳴き声。

それが耳を通し、脳へと語りかける。

「ああ……　　もっと聞きたいが、体が壊れては意味が無い」

快樂と共に来るは耐え難い苦痛であった。

酷使した肉体が悲鳴を上げる。

大きな傷は無いものの、小さな傷が無数に刻まれ、痛みが増してく

る。

神通力で体を無理やり動かしつつ、治癒力を上げていたがそろそろ限度に近いようだ。

そして、悪い癖であり、戦いになると狂気に飲み込まれる。

いくらか直そうとしたが、あまりに大きな狩猟本能（狂気）を止めるのは不可能であった。

しかしこれではあの有名なメアリー・スーではないか。

ワシは出来るものならあんな道化に堕ちたくはないが……。

「後はあいつらに任せるとしよう」

見れば各地で名を馳せた諸侯達が兵をなしてこちらへ向かっていた。戦意の削れ切った賊共では数分せずとも壊滅するだろう。

side 孫策

先生が立ち去ると同時に私達は出撃した。敵はすでに戦意の欠片も無い黄巾党の本隊。

他の諸侯達も手柄を立てんと兵を突撃させる。

「これほど張り合いの無い敵は初めてだ……」

先程の殺戮劇場を見れば当たり前前の事だと思いが……。

恐らく他の諸侯はこの戦いの後、先生を自分達に組み込もうと画策するだろう。

その前に先生を出来るものなら組み込みたい。

たった一人で十万もの黄巾党を壊滅まで追い込んだその武勇を誰が放って置くのかしら？

特に曹操は……。

一時間も経たずに黄巾党の本隊は滅び去った。

あまりにあっけない勝利に皆苦笑いを浮かべるしかなかった。

「だが、先生のおかげでここまで楽に行けたのだ。先生には感謝したい」

それは事実であるが、どうにも感謝できない。

あんな物を見てしまったからかしら？

皆、用を済ませるとすぐに部隊を率いて帰っていった。

「雪蓮。ワシ等も帰るぞ。ここにおいても仕方が無い」

「それもそうね……」

しかしなぜ先生がこんな所へやってきたのだろうか？

袁術ちゃんの画策かしら？ 後で追求する必要があるそうね。

第五卷 反董卓連合1

side 玉藻

黄巾党の本隊を倒し、城へ戻ったワシを待っていたのは雪蓮と美羽、空狐であった。

「おかえり。 どうやら生きて帰れたようだね」

空狐がこちらに冗談と笑みを浮かべながら手を振る。それにワシは手を振り返す。

「うむ。 やれやれ少しは無理をしすぎたか……」

「どうしたんだい？ まさかはり切りすぎてダウン？」

「まあそんな所か」

空狐との対話を終え、すぐ近くにいる美羽の方を見る。 いつも通りの光景。

雪蓮からの報告を美羽は受け取り、雪蓮は帰っていった。

だが今回は何か違った。

いつもなら何かしらの負の感情を出しながら帰って行くが今回はそれが無かった。

恐らく孫呉復活がすぐ傍まで来ているのだろう。

「玉藻。 気づいておるうな？」

「無論。　そろそろ孫呉がワシ等に復讐の刃を向けるじゃろう」

「復讐の刃？」

「そうじゃ。　今まで虐げられた恨みを晴らすかのような」

確証がある訳ではない。　あくまで可能性に過ぎない。

だが可能性がある以上それに用心するのは悪くない判断だ。

自分で言うのはあまりに滑稽に感じるが、奴はワシを欲しておる。

一騎十万などと言う馬鹿げた力を持つワシを放っておくか？

否、奴だけではない。　あの戦いを知る者誰もがワシの力を欲して
おる。

あの戦いから数瞬間後、大陸を驚かす情報が飛び交った。

後閑王朝の十二代皇帝『靈帝』の崩御。

それは各諸侯達の動きを活発化し、大將軍『何進』と十常侍の溝を
深め、何進は十常侍によって殺される。

それを好機と見たのか何進の副将『袁紹』が高らかに叫んだ。

十常将を討つべし！！と。

この乱によって十常将は討たれる。
だがそれだけでは終わらず、今度は一通の手紙が諸侯達へ届けられ
た。

『反董卓連合結成』の手紙が

「これは実に困った事だ……」

手紙を受け取ったワシはその内容を見て苦虫を噛んだような感触を味わっていた。

「なになに？ ……反董卓連合？」

「あのめかけの分際がっー！！！！！！」

ワシから手紙を強奪した空孤は手紙の中を見るが首を傾げてばかりであった。

美羽は従姉の袁紹に怒りの雄たけびを上げていた。

「内容には 董卓が洛陽を占拠したから皆で追い出してしまいましよう」と書いておる」

「へー。じゃあこの董卓って人を倒せばいいの？」

「そうだな」

少しして雪蓮が一通の手紙を持って王室へやってきた。内容は反董卓連合についてだった。

薄々感じていたが、まさかこいつにも届いておったとは……。これですますます反逆の可能性が濃厚に成りおった。

「先生も連合へ参加されるのですか？」

「……そうじゃな」

本来ならこんな茶番には参加する気など毛頭無かったが雪蓮が参加するというなら話は別になる。

ここで雪蓮を放置すれば、恐らく雪蓮は反董卓連合で大活躍するだろう。

そうなれば雪蓮はますます力を付け、孫呉復興への援助や、優れた将が続々と転がっていくだろう。

そうなればいざ反乱を鎮圧する際、厄介な事になりかねん。だからこそ監視の意味も込め、参加する事にした。

side 孫策

反董卓連合へ先生がまさか参加されるとは思っていなかった。先生ならこんな茶番なんて言って断ると思っていたけど……。

やはり私達の反乱を警戒しての参加かしら？

最近、部下からそう言った話を聞くよね。

あの男、なんか孫策様に警戒心持っていない？

弟子の事すら信用しないのかしら？ まあ袁術軍に入るくらいだし

中にはあまり先生へ批判的な声を上げる者もいたわね。

まあ仕方ないか。

「じゃあ袁術ちゃん私はそろそろ… 聞いてないか」

袁術ちゃんは袁紹への恨みを吐き続け、
捕虜だった確か……空孤ちゃんは頭から煙を出しながら手紙を読ん
でいた。

第六卷 反当卓連合2

side 玉藻

あの手紙を受け取り、早二週間。

戦の準備を整えたワシ達は軍を率いて連合の集合場所へ出向いた。

しばらくして合流地点へ着いたワシ等は、連合の発起人であった袁紹の付近へ陣を建てた。

「ではワシが代わりに挨拶してくる。空孤、美羽の世話を頼んだぞ？」

「はいはい。中で囲碁でもしとくよ」

そう言い残し、ワシは他の諸侯達へ声を掛けに出た。

本来なら美羽が諸侯達に挨拶をしに行かねばならないがなるべくトラブルを避けたい為、代理としてワシが行く事にした。

まず一人目は……という所で門番に止められた。ワシは事情を話し、中へ入る。

では改めて、一人目。連合の発起人であり美羽の従姉に当たる『袁紹』。

陣の中にはまるで宝石がそこにでもあるかのような煌びやかな壁や床に、

当の本人はそんな椅子でくつろいでいた。

「あら？ あなたはあの時の？」

「あの時と申すと？」

「黄巾党本隊への攻撃の際ですね。まさかあなた一人であそこまでやるとは思いませんでしたわ」

「ほう」

どうやら彼女はワシの戦いを目の当たりにしたらしい。が、彼女からの評価などどうでもよかった。

なぜなら最初は貶すような言動から始まり、名族自慢。最後に侮蔑やら勧誘がグダグダと流れてきたからだ。

人を貶したり馬鹿にするのが名族かと問いたい所だがワシ自身その名族の世話係に付いている故、何も言っ気が起きなかった。

袁紹の陣を出てすぐ近くに陣があったから中に入ると、そこは雪蓮率いる孫呉の陣であった。

そして中にはその盟主である雪蓮がいた。

「あら？ 先生じゃないですか。何か御用ですか？」

「ん。いや、ただ挨拶しに來ただけだ。すぐに出ていく」

すると雪蓮がどこか寂しそうな顔を見せた。

「残念ね。 もう少ししたら皆帰ってきますのに…」

「どうせ戦場で会うのだ。 どこで会おうと同じ気がするが？」

別れの挨拶を済まし、陣から出ると目の前に美羽と空孤が肩車をしながら立っていた。

「どうした？ 囲碁は飽きたのか？」

「いや、もうすぐ軍議が始まると聞いてな。 お主を呼びに来たのじゃ」

「む。 なら行かねばな」

美羽の案内の元、軍議が行われる場所へとワシは向かった。

大天幕に袁紹とその部下。 美羽とワシと空孤。 曹操に雪蓮。 冥

琳と公孫贇がいるが

空気がやけに重たく、話という話は全然進まなかった。

内容は総大将を誰にするか？

名族である袁紹はやりたそうにしていたが同じ名族である美羽はあまり興味が無さそうであった。

なぜかと問うと「兵法とか分からぬから」と素直に答えてくれた。空孤はそもそも何話しているか全く理解していなかった。

雪蓮に視線を向けると、雪蓮から「先生が総大将やります？」と言っているかの様な視線で返された。

少しして公孫贄がこの重い空気に耐えられなくなり、天幕を後にした。

だが、彼女はすぐ戻ってきた。二人の男女を連れて。

「私の名は劉備と申します。そしてこちらは天の御使いであり、私のご主人様の」

「本郷一刀だ」

現れた二人の内、劉備の方は知っていた。

義勇軍でありながら連勝を重ねる軍団として……。

だが、もう一人の本郷一刀については話を一個も聞いていない。

雪蓮もその存在に首を傾げていた。

「なああんたらは何やってんだ！！ たかがそんな事で揉めている場合かよ！！」

こうしている間に董卓の連中は軍備を整えているんだぞ！？ それが分からないのか！？」

かかか。確かにその通りよ。

こうして腹の探り合い、睨み合いをしている内に董卓は軍備を整えているだろう。

「んまあ失礼な人ですね！ 礼儀の一つも知らないのですして？」

……それを今言うかと問いたい。

そんな話は軍議が終わってからにして欲しいものだ。

とにかくこんな茶番を終わらせるべきか。

「……袁紹とやらよ。お主は名家の者だからお主がなればいいのではないか？」

「あら？ あなたはどうやら私の価値を分かっている様ですね。いいでしょう。総大将はこの私が務めますわ！！」

その後、周りから拍手と呆れた笑みが湧き起こった。

その後、曹操と冥琳が出て行った。

冥琳は天幕を出る際、ワシにこう告げおった。

よくぞ終わらせてくれました。雪蓮に代わりお礼申し上げます
先生

あの後、茶番とも言える軍議は無事進行し、作戦と呼べる作戦……も出てとりあえず解散となった。

「じゃが、これは無いだろ……」

作戦の内容が記された巻物には以下の事が記されていた。

可憐に美しく、猛猛しく、突撃せよ

「あやつ、真面目に考える気があるのか？」

あれば普通こんな作戦は思いつかんと思うが……。まあいい。
もうすぐ戦争が起こるのだからな。

あの時の快樂が体に蘇る。

side 空孤

袁紹の命令で、全軍が一齐に？水関へ突撃を開始する。

確か軍議では劉備ん所が最前線で袁紹が一番後ろ。

後は右翼に曹操、左翼に孫策。中央にあたし達が部隊を構えていた。

「劉備の所、なんか様子がおかしいね……」

見ると、最前線で戦っている劉備の所が敵と纏れ合いながら徐々にこちらへやって来ている。

あたしは後ろに控えている5000の部下に戦闘準備の合図を送り、様子を見る事にした。

いくら義勇軍であり、弱小でありながら最前線に位置付けられているとはいえ

まさか味方を巻き込む真似はしないとしたい。

だが、現実はその甘く無かった。

敵がこちらの存在に気付き、劉備の軍勢を蹴散らしながらこちらに突っ込んできた。

私達は後ろへ下がりつつ、持っていた弩で敵を倒していた。

「姉御！ これ以上下がれば本陣へ着いてしまいます！！」

それはまずい！！ これではあたし達まで劉備と同じ事をしてしま
う！

そう思っていた矢先、突如一つの影が敵部隊を吹き飛ばした。

「おおおおおお！！！！！！」

玉藻だった。

彼は雄たけびを上げながら手刀で敵部隊の一つを吹き飛ばし
飛びついてくる敵を掴み、別の敵へぶつけた。

「邪魔だあ！！！！」

彼の剛拳が敵の顔を砕くと同時にその近くに居た兵士もその衝撃で
吹き飛ばされる。

……なら、あたしも参加するか。

「お前達は弩を打ちつつ前線を維持しときな！！」

「了解！ 姉御！！」

命令を下し敵の塊へ突っ込んだ。

あたしはまず目の前の兵士を掴み、それを鞭の様に振り回し周りの
兵士達を薙ぎ倒す。

「弱い！ 弱すぎる！ このまま敵部隊を突破し、

大将の首を 「邪魔だっ！！！！！！」……っ！ なんだ！？」

突如現れた大将らしき女を玉藻がアイアンクローで部隊と距離を取った。

この瞬間、玉藻と大将の勝負が幕を開けた。

第七卷 反董卓連合3

side 一刀

華雄を？水関まで引つ張り出したまでは良かった。

後は鈴々が華雄を討ち取るうとした瞬間、突如現れた老兵に横取りされた。

あの老兵は確か玉藻ってやつだ。

軍議の際、まるで自分は関係無いと言わんばかりの態度を取っていた奴だ。

そんで戦いが始まった途端

俺達が連れ出してきた兵士を片っ端から薙ぎ倒した揚句華雄を横取りしてきた。

勝手に出てきた奴に俺達の手柄を取られてなるものか。

朱里に意見を聞いてみても望んだ回答は得られなかった。

「玉藻さんが敗走して、鈴々ちゃんがすぐに華雄に挑む様にならないと……」

でも玉藻さんは一人で賊を十万人倒しちゃった人ですし……

？水関には先ほど孫策さんが部隊を率いて向かっていました」

最悪の場合、？水関と考えたのにまさか孫策が向かっているなんて……。

これでは俺達は単なるお荷物じゃないか。

「……そうだ！」

華雄が一騎打ちに夢中になっている内にこっそり弓矢で：「駄目ですよ！！」

朱里が顔を真っ赤にして怒鳴った。 いや、それだけではない。 周りの皆が急に怖い目つきに……。

「ご主人よそれは本気か？ いくら手柄を立てなければいけないとはいえ

一騎討ちは戦の花。 それを勝手に辞めさせる事など許されはしないぞ」

星の言う事がイマイチ理解できない。

どうしてお荷物とか言われるのは良くて、それを避ける為の行為が非難されるのか？

「でもこのままじゃ俺達はお荷物になるんだぞ！！

周りの諸侯達から邪見に扱われるんだぞ！？

何としても華雄を倒すしかないじゃないか！！」

俺は皆の反対を押し切り、弓兵と鈴々を連れて出撃した……。

side 玉藻

「はあっ！！」

華雄の戦斧に拳をぶつけ、弾く。

余った左で水月に叩き込もうとするが、紙一重でかわされ拳は空を殴る。

「どう言う事だ！？ 斧を生身で弾くなど聞いた事無いぞ！！」

「鍛えれば誰でもできるわい」

華雄の質問に答えつつ、脇腹に回し蹴りを当てる。
効いたのか奴の顔に歪みが生じた。

「……私は、退かぬ！ 董卓様を貴様等の様な何も知らぬ輩から守る為に！！」

そう言つて奴は戦斧を勢い良く振り落とす。 王シはそれを手刀で弾き飛ばす。

「董卓とやらは暴政を働いているのではないのか？」

「違う！ 董卓様は心優しきお方だ！ 人が傷つくのを嫌うお方だ！！」

それをお前らは暴君だと決めつけ、集団で命を奪おうとしている……」

華雄の一撃を拳で受け止める。 華雄の一撃は突如重く感じた。
そしてそこから伝わる。 董卓への思い。 王シ等に対する怒り。

「そんな貴様等の方が悪ではないのかつ！！！！」

華雄の怒りが乗せられた一撃に王シの拳が弾かれる。
よほど董卓の事を信頼しているのか……。

久しぶりに狂気とは別の昂りを感じさせるわい。

「ならば王シを倒し、それを証明して見せろつ！！」

「言われなくともっ!!」

奴の振り落とす戦斧を拳で弾き

その腕に拳をぶつけようとすも、紙一重で交わされる。

足払いを食らうも、腕をバネに飛び上がり、復帰する。

心臓を貫く為に放った貫手は戦斧で防がれ

弾かれると同時に放たれた一撃を右へ避ける。

首元に放たれた斬撃を交わし、その凜々しい顔へ拳をぶつける。

だが奴は臆する事も、怯む事無くワシの胸に戦斧を叩き込んだ。

距離を放し、助走を付けた飛び蹴りでダメージを与えるも

奴はすぐに態勢を整え、ワシに仕返しとばかりの裏拳をぶつけた。

無数に放ったワシの拳を奴は切り払い、反撃とばかりに放たれた一閃を受け止める。

「かかっ! 強いのお主。こうして戦うのが楽しく思えるわい!!」

「そっだ……な!! 私もあんたと戦つてると楽しくなってきたよっ!!」

メコオ!! ザグシュ!!

「もしかするとお主の言う通りやもしれんなっ!!」

「何だって……!!」

ドグォー！！ ブシュ！！

「董卓が暴君で無い事だつ！！！！！」

バコォー！！！！

「ぐうう！！ まだだあ！！！！」

拳で奴の肉体を殴り、奴の戦斧で刻まれ、互いの思いをぶつけあう。奴が董卓という奴の為に戦っている事が拳や戦斧を通じて伝わった。

side 華雄

あいつも私ももう肉体がボロボロなのに不思議と力が湧いてくる。そして、容赦なく己の力をぶつける。

なんだろう……。

こうしてあいつと戦っているとこれが戦争だと忘れてしまいそうになる。

あいつと、こうしてずっと戦いたいと思ってしまう。

あの連合は最初の頃は、名を上げただけの単なる野蛮な連中と想っていた。

無論あいつも例外ではなかった。

だが、こうして競い合ってる内にその偏見はいつの間にか消え失せ

ていた。

こいつはそういう奴ではないとそう感じてきた。

「かかか……。 お主、足がカタガタに、震えておるぞ……!!」

「貴様こそ……。 全身傷だらけではないか!!」

だがそれは私にも言える事であった。

戦斧を持った手はいつの間にか赤く腫れあがり

所々黒ずんで感覚は無いに等しかった。

足も赤く腫れ、脈が手に取る様に感じる。

あいつの体も赤く染まっかけていて

その強靱な肉体は戦う前よりもさらに強靱さを見せていた。

息がうまくできない。 空気を取り込もうとしてもなかなか奥へ入

らず、否

そもそも息していたのかな私……。

あまりに楽しすぎて息する事すら忘れたのか？ ハハッ……。

「うおりやあ!!」

「ふんっ!!」

雄叫びと共に放たれた手刀を戦斧の刃で受け止める。

まるでそこに本物の刀が在るかの様に重く、鋭く感じられる。

突如腹部へ放たれた貫手を流れるように交わし、がら空きとなった

その腹を一閃した。

「ぬうつー!!」

だが、思ったよりダメージは与えられず彼に掴まれ、地面に叩きつけられた。

「ぐうつ…!!」

背中に激痛が走り、口から血を吐きだした。

私はそれでも立ち上がった。

「もう限界のはずだ。いい加減降参でもしたらどうだ？」

「それは……できない」

董卓様を守る為に……ここで負ける訳には……。

だが体はそんな私の願いを拒否するのか、戦斧を握っていた手はだらりと落ち

足は感覚を無くし、歩く事さえできなかった。

追い打ちを駆けるように雪が空から降り注いできた。

私の体に着く度に体の力が抜けていく感じがする。

ここまでか……。けど、悔いはそこまでないかな……。

「……どうやらここまでのようだな」

「そうだ、な……。どう…するんだ？ ……一思いに殺すのか？」

「お主が望むならそうしよう」

「じゃあお願いするよ……。あつ、ひとつ頼みたい事が、あるんだ」

「なんだ？ 言ってみろ」

「董卓様に……。守れなくてすまない……。つて……」

「……。いいだろう。その言葉。しかと伝えてやる」

そしてあいつは私を見据え、拳を力強く構えた。

……。あれ？ おかしいな。

あいつの手がいつの間にか白い毛に覆われ、握りしめた手は神々しく光ってる？

ハハ……。幻覚かな？……。でも、悪くないかな。

「さあ……。安らかに眠るが「皆、矢を放て！！」……グオオ！！！」

私に止めを刺そうとした瞬間、短い叫びを上げながら崩れた。見ると、背中に矢が何本か突き刺さっていた。

「華雄様！ ご無事ですか！？」

「これは……。お前達が……？」

私を迎えに来た兵士に質問するが、兵士は誰一人知らないと言う。
そして私は兵士達に支えられながら戦場を後にする。

「恐らく義勇軍の連中ではないでしょうか？」

「義勇軍？」

「はい。自分は一時期義勇軍の方々と一緒に居ました。
あの声は義勇軍の、確か……天の御使い様の声でした。間違いありません」

「どう言う事だ？ なぜ味方であるそいつが、あいつに矢を当てたのだ？」

「大方、功を焦った結果でしょうな」

「確か義勇軍の連中が我等をここまでひっぱいてきたしな。
それを横取りされまいと、彼に弓矢を放ったんでしょうな」

「そんな……。そんな事があっていいのだろうか！？
あいつは、そんな傲慢な奴に殺されたともいうのかっ！！」

「あのやるオ！！ ……グウウ！！」

「華雄様！ まだ傷は治っておりません！！ 無茶をされては困ります！！」

「だが……、あいつがそんな汚い奴に殺されたんだぞ！！」

「分かっております！ しかし今行かれてもその汚い奴に殺される

だけです！！」

「そうです！ 今は生き、傷が癒え次第、その汚い奴に仇討しまし
ようー！」

正直、ここまで屈辱を味わされたのは初めてだ。

目の前に仇敵とも言える存在がいながら、尻尾巻いて逃げるなんて
……。

部下達の説得を聞きながら、私は？水関の先の虎牢関へと逃げ延び
た。

side 空孤

私が彼の元へ辿り着いた時、彼は余りにも無残な姿だった。
背中は矢が何本も突き刺さり、痛々しさが直に現れていた。

体はそれこそ血まみれで今にもバラバラに砕けそうなほど切り刻ま
れていた。

けどあたしはちっとも悲しまない。なぜなら

「早く担いでくれんか？ ワシ、今にもしにそうなんだけど」

「少なくともそこまで話せる時点で大丈夫だから。 うん」

だが、ヤバイのは確かだ。 こんな所で放置していたら流石に凍死
しそうだし。

あたしはおんぶするかのよつに玉藻を担ぎあげる。

「しかし、随分とやり合ったね」

「ふむ。ワシをここまで追い詰めるとはあやつやりおるな」

「それでもまだ人間での話だろ？」

「それでも追い詰めた事には評価するわい。そりゃ元に戻れば話が違ってくるわい」

「はは。確かにそうだね。まあ戻ったら間違いなくヤバいけど」

数十分後、ワシの姿を見た者達が大慌てで軍医を呼び出し、ワシはそのまま医務室へと運ばれた。

第八卷 反董卓連合4

side 袁術

案外、外の様子を見るのは悪くないものじゃ。

兵士がどう言った動きで敵を対処するか、どう言った策で敵を追い詰めるか。

それを見るのはここに来ての唯一の楽しみじゃ

？水関陥落は孫策の一人占めだが、それを悔いても仕方あるまい。
下手に悔いていたら、玉藻に説教されかねんしう……。

「ご報告があります！」

「なんじゃ？ 申してみよ」

兵士が大慌てで妾の部屋へ入ってきた。もしや、敵がもうすぐそこまで来ているのだろうか？

「玉藻殿が矢で射られました！」

「……あそ。報告御苦労であつた」

兵士は豆鉄砲を食らった様な顔をしながらも、大慌てで部屋を後にした。

それはそうだろう。部下が射られたのにここまで冷静になれる方がおかしいという物。

じゃが、あいつが矢で射られただけでは倒れない事を妾は知っているからのう。

まあ大丈夫じゃろ。せつかくじゃ、医務室に見舞でも行ってみるか。

数分歩いた先に医務室を見つけ、中に入った。

中は血肉の匂いで満ち溢れており、あまりいい環境ではなかった。

呻く兵士とそれを励ます兵士。

まさしくそれは、戦争の悲惨さを物語っていた。

さて、玉藻は……。おお、いたいた。のんきに布団の上でくつろいでいた。

近くにはボロボロの空孤がいる。

妾が声を掛けようと近づいた所、何かが妾の後ろから滑り込むように割りこんできた。

正体はすぐに分かった。孫策と冥琳であった。

「先生！ ご無事で……！！」

「言ったであろう？ 先生がこの程度でくたばるものかと」

彼女等はそう言って安堵の表情で先生を見た。

先生もそれなり美女に囲まれているのか、なんだか嬉しそうに見える。

「お主等、？水関はどうしたのじゃ？ まさか……」

「1」安心を。　すでに攻略しております。　先生はゆっくりと……」

「……華雄との決着が済んではおらぬ」

ほう……。　玉藻は華雄とまたやりたいようじゃな……。

「玉藻。　それほどそ奴と決着を望みたいか？」

妾の声に玉藻を含めた皆がこちらに振り向く。　空孤は首を傾げつつ、何か考え事をしていた。

「なら妾が説得し、最前線に送り込んでやるうぞ」

決着を望む者を封じ込めるほど妾は外道ではない。
むしろそれによって士気が上がればさらに事はうまくいくであろう。

「けど、まずは初めに劉備の所に少しヤキ入れに行かなきゃねえ……」

今度は空孤の方へ皆が振り向く。

普段のおバカな姿はどこにもなく、あるのはドス黒く染まり果てた空孤がいた。

「あたしの玉藻に傷つけたんだ。　それなりの代償払ってもらわな
いとねえ……」

あたしという言葉に強い反発を感じたが、そんな事さえ許さないぐ
らいの殺意が彼女から漂っていた。
まるで鬼に対峙したかのように体が凍りつく感触が全身を廻る。

「天の御使いやらなんやら知らないけど… ただのガキじゃない。少し脅せば、それなりに懲りてくれると思うけどねぇ… あたしは」

「それなら、今度虎牢関で軍議をやる事にしておるがその時にすれば良いであろう」

冥琳の何気ない一言に彼女は顔を引きつらせる。口がそれこそ耳まで届くぐらいに……

side 空狐

二日の行軍を終えて、あたし達は虎牢関の前に辿りついた。玉藻は軍医が驚くほど完治していた。それこそ戦う前と同じくらいに……。

軍議が始まるので

大天幕で待っている、続々と諸侯達が入ってきた。その中に劉備、天の御使いも混じっていた。

その顔はどこに暗が存在せず、明るい笑顔であった。普段ならそこまで気に掛けない笑顔も、今では憎悪を湧きただせる存在でしかなかった。

「では、これより軍議を「少し待ってくれないか?」……なんですの?」

袁紹の軍議開始の挨拶を止め、あたしは天の御使いへと顔を向ける。すると彼はどこか気まずそうな顔をしだした。

「あんたはなんで玉藻を射貫いたんだい？」

その言葉に一部を除いた他の諸侯達にどよめきが起こる。一部とは袁術と玉藻と孫策達だ。

「あたしは見ていたよ。あんたが弓部隊を率いて玉藻に弓引いたのを……」

「ご主人様……！？ そんなの聞いてないよ！？」

「あれは玉藻が当たりに来たから悪いんだ！俺は華雄を討ち取るうと……」

華雄を討ち取りたい為にか……。

別にあたしはそんな事どうでもいいんだけどね……。

「一つ言っておこう……」

周楡が天の御使いへ視線を向ける。

「お前のした事は、華雄と先生。二人の誇りを踏み躪るに値する。今、この場で先生に殺されても何も文句も言えんぞ。それを分かっているのか？」

天の御使いを含め、全ての諸侯が玉藻に視線を集めた。玉藻は一息入れ、口を開いた。

「……別に殺す気など無い。ただそれなりの謝罪を見せてもらおう。
金を払うのではなく、人質を渡すのではなく、誠意を込めた謝罪を望む」

その言葉は諸侯達を驚かせた。

恐らく彼女等は玉藻が天の御使いを殺すのではないかと予想していたのだろう。

しかも内容が何の変哲もない事で、拍子抜けする者もそれなりにいた。

「なんで……謝らなきゃいけないんだ」

……はい？

彼は呟くと同時に机を叩き、立ち上がった。

「元は袁紹が俺達を前線に配備するのがいけないんだろうが！

それと、俺達が考え付いた作戦をあいつが邪魔しなければこんな事にはならなかった！！

それなのに、なんで寄ってたかって俺達を責めるんだ！！」

そう言っただけは玉藻を睨みつける。どうして逆切れされなきゃならんのやら……

「ワシが華雄と戦いを始めたその瞬間から、お主の作戦とやらは失敗した。

じゃが、お主はそれを失敗だと認めず、あまつさえ矢をワシに当てたからじゃよ」

玉藻の言う事に嘘は無く、天の御使いもこれ以上反論する余裕が消えうせていた。

その後、特に問題なく軍議は進み、玉藻と袁術の申し出で再び以前と同じ編成になった

リメイク

この作品の誕生。 及び老狐と蜂蜜姫打ち切り、リメイク化へのコメント

玉藻「理由は主人公であるワシの目的が存在していないことじゃ」
天武「いやーごめんねー。 丁度董卓連合の時にふと考えててね」

玉藻「それぐらい考えとけ」

天武「めんごめんごー。 この作品ではちゃんと書かれてるよー」

玉藻「空孤という少女を守る…か？ 悪くないな」

天武「それと、袁術軍じゃなくてオリ軍勢として出てもらうから」

玉藻「？ どういうことだ」

天武「ロリヒロインは一人で十分だよ。 二人三人出しても馬鹿らしいし」

エロゲじゃないんだから、ヒロインは一人で十分だよ たくさんだしやいいもんじゃない」

玉藻「…というわけでリメイクか」

天武「そういう事だ。 まあ恋姫自体エロゲなんだがな……」

玉藻・天武「老狐と蜂蜜姫リメイク版。 侍狐と少女狐どうぞよろしく願います！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8620w/>

老狐と蜂蜜姫

2011年10月30日23時19分発行